

「地元から世界へ」

何故か落ち着く思い出の場所って、誰しも一つくらいあると思います。私の場合は、神学部の校舎にあった休憩用ラウンジが思い出の場所です。もちろん、他にもありますが、とりあえず思いつくのが、そこ。別に、そのラウンジで良いことがあったわけじゃなく、むしろ、嫌な思い出も少ないのですが、なんとなく、今の自分を支えている経験の、象徴のような場所なんですね。2 年の 1 回の神学協議会や、献身キャンプのスタッフ会なんかで、時々、神学部のラウンジを訪れて、さして高級感があるわけでもない普通の布地のソファに腰かけて、一息つくと、色んな昔のあれやこれやが思い出されます。さっきも言ったように、別にその思い出がすぐさま自分の癒しや落ち着きに繋がるわけではなくて、嫌な思い出も浮かんでくるのですが、重要なのは、そういう全ての思い出を「懐かしいなあ」って感じられる、今の自分の成長と言うか、心境の変化が、なんか誇らしくて、嬉しくて、ホッとするんですよね。今でもまだ若い年齢と言われようと、さらに若かった 20 代の思い出は、私にとって自分の経験の豊かさを感じさせる基準点みたいなものですね。学びもしたし、失敗もした。助けられたこともあれば、助けたこともあったし、逆に傷付けたこともあれば、傷付けられたこともあった。どんなに平凡な人生だとしても、休みなくやってくる 1 日 1 日を無感情に、何事も無く過ごすことはできません。その感情の起伏、出来事の連続が、思い出となって積み重なり、ある切っ掛けで「懐かしいなあ」という印象と共に思い出される。そして、その当時とは、良くも悪くも成長し、変化した自分に気付かされる。

イエス様の弟子たちは、イエス様によって弟子の権能を授けられた場所であるガリラヤに行けと言われて、どう思ったのでしょうか。そして、実際に、ガリラヤを訪れて、どんな気持ちになったのでしょうか。福音の始まりの地であり、弟子たちが弟子としての歩みを始めた場所。ガリラヤ。弟子たちは、その務めを負ってから、すぐに未熟ながらも多くの町に派遣されました。また、イ

イエスの様々な御言葉と御業に触れ、学びと経験を深めました。イエスの十字架の予告に対して理解が及ばず、悲しんだり、見当違いなことを言ったりもしました。イエスの側近になりたいと弟子同士で拙い言い争いをすることもありました。いよいよエルサレムに入った時には嬉しい歓迎を受けました。一方で、イエスの十字架が確実に近づいてくる予感もありました。ユダによる裏切りが進み、最後の晩餐において、それは決定的なものとなりました。イエスが裏切られ、逮捕され、裁判に掛けられる一連の出来事をただ見ていました。あまつさえ、イエスなんて知らないという一番弟子の姿もありました。ただ、その後の出来事においては、弟子たちの関与は、ほとんど語られません。弟子たちは、イエスが侮辱されながら、十字架に掛けられた場面にも、大声で叫ばれ息を引き取られた場面にも、墓に葬られる場面にも、居合わせなかったのです。

と言うような、思い出を重ねた弟子たちが、イエスの御言葉によって始まりの地に帰って行きます。正確に言うと、婦人たちによる天使とイエスの伝言によってですが、ともあれ、ガリラヤへの帰還を目指すことになります。今日の聖書箇所は、その始まりの部分です。短くも濃密で、喜びと悲しみ、成功と失敗を繰り返しながら、イエスの弟子として歩んだ彼らの心の中を、想像してみると、聖書の本文には表れない、豊かなメッセージがあるように思います。1～4 節までにある煌びやかな天使の来臨と伝言の記述は、確かに見応えがあり、読み応えのある場面でしょう。番兵たちが震え上がって失神したという描写も、人によっては胸をすく爽快感があるかも知れません。しかし、そうしたキラキラした描写では、満たしきれない復活のメッセージがあります。奇跡のような出来事を理解しようと努力しても、それは無理な話です。理屈で解き明かすことはできません。しかし、その奇跡を目の当たりした人たちは、どんな気持ちだったのだろうと想像することには意味があります。そして、その御言葉を聞いて、何を感じ、期待し、行動に移したのか。

懐かしい場所で、もう会えないと思っていた大切な人に会えるかも知れない。その期待や希望が、どれだけ弟子たちの心を燃やしたのか、と想像します。もちろん、ヨハネによる福音書には疑い深いトマスが登場しますし、マタイによる福音書においても 28 章 17 節において「しかし、疑う者も

いた」としっかり報告されています。復活したイエス様に対して、皆が100%の信頼を置いていたわけではないでしょう。でも、困った時、悩んでいる時、塞ぎ込んでいる時、「あの人にもう一度会える」という知らせが、嬉しくない、わけないですよ。嬉しいに決まっています。それは、私たちにとって、非常に困難な時に、親愛なる友人と再会するような、尊敬する恩師と再会するような、そんな経験だったんじゃないでしょうか。気持ちが弱って、本当に助けが必要な時に、懐かしい、あの場所で、今、最も会いたいと思っている人が、待っている。イエス様の復活には、そういう感情を揺さぶるドラマチックな側面があることも、読み取って良いと私は思います。

そして、「重要なのは、懐かしい、あの場所で、今、最も会いたいと思っている人」と再会できて、癒されて終わりではないということです。マタイによる福音書において、弟子たちはガリラヤにある山で、イエス様と再会しますが、そこで言い渡されるのは、「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にきなさい」という、いわゆる大宣教命令です。慣れ親しんだ地元に戻って、恩師に励まされて、次なる目標は、「すべての民」であると。弟子たちは、懐かしい場所から、世界へと目を向けて、新しい歩みを踏み出したわけですね。もっとも、正確に言えば、踏み出さざるを得なかった、という面もあったかも知れませんが。いずれにしても、弟子たちは、始まりの場所であるガリラヤで、かつてと同じことを繰り返すのではなくて、さらに大きく、さらに広いステージへと引き上げられていった。

私が思うに、それこそイエス様の復活の力ではないでしょうか。絶望から希望へ、諦めから再起へ。神様の子どもが蘇ったという奇跡は、一つの命が取り戻されたという狭い話ではなくて、それによって、今に続くキリストの歴史が始まったということです。未だ完全ではないにせよ、世界を覆う平和と愛を求める信仰が、イエス様の復活によって、力強く伝播していった。そして、その伝播していった信仰の、一つの結果が、私たち一人ひとりの救いであり、この教会の設立であり、幼稚園の始まりです。そういう形で、イエス様の復活は、ちゃんと目に見えて、触れて、感じられるようにできています。

だから、「イースター、おめでとうございます！」とキリスト教らしい挨拶をする時に、心に留めていたいの、「イエス様の御復活によって、私の大好きな【今、ここ】が創られた。だから、めでたい！」ということです。そして、今日も、この後、教会墓地に行き、墓前礼拝を行いますけれども、その時にはきっと敦賀教会の信仰の先達に感謝の気持ちも浮かんでくるでしょう。であるならば、イエス様の御復活によって、更なる信仰と熱意を燃やされた、あの弟子たちにも、私たちは感謝したいと思います。復活物語を空想にしてみないように、弟子たちの頑張りを無下にしないように。彼らの気持ちと経験を想像してみたいと思います。

今日は、イエス様を愛する気持ち、神様を信じる気持ちを、再び燃え上がらせる日です。2000 年前に起こった御復活の出来事を、私たちの慰めや励まし、また教会と幼稚園の歴史に結び付けて、深く味わってみましょう。今日から始まる新しい毎日が、イエス様の御復活の希望に照らされて、明るく幸いなものでありますように。最後にお祈りを致します。

神様。

今日も私たちをこの礼拝堂へと招いて下さり、感謝致します。あなたは、イエス様の御復活という、にわかには信じられない方法で、私たちの人生に消えない希望があることを示してくださいました。そして、復活の主に出会った多くの人たちを励まし、力づけ、2000 年に及ぶキリストの歴史を紡ぐことで、その最先端の場所に、私たちを置いてくださいました。連綿と受け継がれてきた信仰、その信仰によって救われ、励まされてきた歴史の先に、私たちはいます。そのことを知って、信仰の先達に感謝すると共に、私たちも復活の主を宣べ伝える者として、今日から始まる新しい毎日を歩んでゆくことができますように。主の御復活から続く現在進行形の福音の物語が、私たちと隣人と、この世界を明るくし、平和へと導いてくださいますように。確かな期待を胸に、今、祈ります。

このお祈りを、復活の主であるイエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。